



宝塚市立良元小学校 学校通信

良元通信

家庭数
配布

令和6年(2024)11月15日号

校長 狩野 洋光

みんなが幸せになるために

来週から人権同和参観と懇談会がはじまります。「みんなが幸せになるために」をテーマに、子どもと先生と保護者といっしょに考えていきたいです。10月に行われた解放文化祭では、良元小学校からも作品を出展しました。そのうちの二つの作文を紹介します。

つえをついたおじいさん

3年生

この前、コンビニに行ったら、買い物をしているつえをついたおじいさんがいました。おじいさんは、かた手なので、冷蔵庫のドアを開けられなくて困っているようでした。お母さんがおじいさんに、「お手伝いしましょうか」

と声をかけて助けていたので、それに反応してぼくもお手伝いしました。

ぼくは飲み物をとってあげて、かごを持って、レジまで行きました。おじいさんはお金を払ってお礼を言って、さっていきました。

歳をとって買い物は大変そうでした。また、おじいさんみたいに困っている人を助けたいです。

◆子どもの作文には、「ねうち」がかくれています。いっしょに見つけてみませんか。

○つえを見て「あれっ?」と思ったのかもしれないね。おじいさんの様子をよく思い出して書いています。

○やさしさを言葉にできるお母さんです。お母さんの言葉に反応した「ぼく」も素晴らしいです。

○お手伝いをしたことを書いているだけなのに、「ぼく」の爽やかさが伝わってきます。おじいさんも嬉しかったことでしょう。

○困っている人に気が付いたことにねうちがありますね。気が付いて行動につないだことも素晴らしいです。

「あれっ?」と気が付いたこと、お母さんの「手伝いましょうか」に反応したこと、この出来事を文章にしたこと、たくさん「ねうちのあること」が書かれています。作品を読んだ人によっては、「ねうちのあること」がまだ見つかるかもしれませんね。

人権学習は、ウェルビーイングな社会をつくるために欠かせない学習です。この作文には、子どもに見せたいウェルビーイングな社会の姿があります。大人が子どもによりよい社会の姿を見せていきたいものですね。

次は、6年生の作品です。人権について、差別について、よく考えています。少し省略して紹介します。

アメリカの黒人奴隷制度について 6年生

私がなぜこのテーマにしたのかというとリンカーン大統領の伝記に興味を持ったからです。

黒人奴隷制度とは、リンカーン大統領が、奴隷解放宣言をする前にあった制度のことです。当時は奴隷という、人としての権利と自由がなく、商品として売買される人の存在が認められていました。

そこで、私はアメリカの人たち（全員ではないと思うけど）は、奴隷となった黒人の気持ちを考えたのかなと思いました。なぜかという、黒人の話も聞かずに強制的に、しかも子どもまで働かせているからです。人権がないのと同じだからです。

私は、アメリカの人でも、黒人奴隷制度に反対する人はいたと思います。反対する人が一人なら捕まるかもしれないけど、百人、千人、一万人、十万人の人が、みんなで協力して、奴隷制度を反対し続けて、制度を廃止することができたら、つらい思いをした人や人生をめちゃくちゃにされた人が、その後は幸せに生きられたんじゃないかと思いました。

次号に続きます

◆リンカーン大統領の伝記にふれて、「おかしいなあ」「なんでだろう」と疑問をもっています。そして自分で考え、自分なりの答えを出しています。差別、いじめについて考えることは、自分自身の生き方を考えることでもあります。

○「人権」という考え方がなかったとしても、「同じ人間なのに……、おかしいぞ」という感性を持った人がいたかもしれません。でも、当時は「人権」という考え方がないことが「ふつう」だったのでしょう。

○「同じ人間なのに、おかしい！」と声をあげることは、「命がけ」でした。自分の命と引きかえとなっても、守りたいものがありました。

○自由と人権を守るために活動した例として、インド独立運動のガンディー、アメリカのキング牧師、南アフリカのマンデラ大統領がいます。日本では「渋染一揆」があります。

次号に続きます